

## 解説

著者	斯 琴
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	114
ページ	5-26
発行年	2013-06-28
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00008921">http://doi.org/10.15021/00008921</a>

## 解 説

ス  
チン  
琴

### 1 調査地の概要

本書は、モンゴル国アルタイ山地域の西モンゴルの諸集団に関する口頭伝承の資料集である。

アルタイ山脈は、西北から東南方向に延び、モンゴル国南部のゴビ地帯まで続いている。その北麓にはハンガイ山脈とホブド盆地をはさんで多数の内陸湖や川があり、南麓にはブルガン川流域に、湖沼や川に恵まれた牧草地がある。このブルガン川流域が本書の語りの主たる舞台となる。

アルタイ山脈には多くの諸集団が暮らしてきた。それら西モンゴル諸集団は、一般にオイラトないしオイラドと総称され、オーロド、ドゥルベド、バイド、トルグード、ホシュド、ザハチン、アルタイ・ウリヤンハイなどの集団名が知られている。

これらのオイラト諸集団の生活領域は、現在のモンゴル国西部のみならず、中国新疆ウイグル自治区の領域まで広がっていた。18世紀にジュンガル帝国が滅びたのち、諸集団は清朝の支配のもとで再編され、改めて牧草地を与えられて、政策上、移動させられ配置された（表1、表2参照）。

古くからのオイラト諸集団は、モンゴル帝国の統治下に入ってからアルタイ山脈の南北を移動し、異集団との接触により、統合と分裂を繰り返しながら、アルタイ山脈に源を発するイルティシュ川の上流域を中心に、天山南北麓まで活躍した。諸集団のうち、本書資料の語り手であるノースタイ氏が所属するのはトルグードである。

トルグードは、13世紀にチンギス・ハーンのモンゴル帝国の傘下に入ったケレイト人の後裔であり、14世紀の末に4オイラト連合に新しく加わった集団である。16世紀から17世紀のはじめ、トルグードはホシュドとドゥルベドと共にイルティシュ河の上中流域に遊牧した。その後、トルグードの大部分はホー・オルロク首領に率いられてイジルザイ（ヴォルガ）とジャイ（ウラル）河に移り、少数の一部はアルタイ山脈南麓のウリンゲ川、ブルガン川、チンゲル川流域で暮らしたが、のちに西へ移動したトルグードを求めて移動した。

このうちの一部が、1771年に、イジルザイ（ヴォルガ）とジャイ（ウラル）河のトルグードの7代の子孫の一部とともにオイラトの故郷イリ河地域へ帰還した。また、清朝からの命により、このうちの一部のトルグードがアルタイ山脈南麓に移住させられたため、ブルガン川とウエンチ川流域がトルグード人の放牧地となった。

この地域のトルグード集団は2つのホショー（旗）を構成し、それぞれの領主は君王、貝子の爵位の世襲が認められた。1884年、6代目の君王としてミシグドンルブが世襲し、1917年に親王爵位になった（Oirad-MongGol-un tobci teüke bicikü tasuG 2000 : 351）。1891年、6代目の貝子はマグサルジャブによって世襲され、1912年、貝勒の爵位になった（Oirad-MongGol-un tobci teüke bicikü tasuG 2000 : 352, 762）。これらのトルグード人が、のちにモンゴル国ホブド県ブルガン郡のトルグード集団となった。

モンゴル国ホブド県には17の郡が置かれ、ハルハ、ザハチン、カザフ、ウリヤンハイ、オーロド、ドゥルベド、ミンガド、トルグードといった諸集団が暮らしている。人口の約49.4%は県と郡の役所の所在地に集中し、約50.4%が草原部で遊牧をしている。17郡のうちのブルガン郡は、モンゴル国で唯一トルグード人が集中する郡として知られており、トルグード郡とも呼ばれるほどである。

## 2 調査の概要

本資料の収集は、2007年から2008年にわたるフィールド調査によってもたらされた。2007年には、モンゴル国ホブド県のマンハン、ムンフ・ハイルハン、ドード、エレデンプリンという4つの郡とホブド市、そして、オブス県のトゥルゲン郡を訪れた。2008年には、ホブド県のブルガン郡を訪問した（地図参照）。

### 2.1 2007年の調査概要

2007年9月1日から21日まで、口承文芸を研究する目的で、西モンゴルでフィールド調査をおこなった。「モンゴルにおける山岳崇拜——アルタイ山脈について調査研究——」というテーマで口承文芸に登場するアルタイン・エゼンとよばれる守護神が、現地の人びとによってどのように考えられているか、どのような信仰行為が実践されているかについて地域の生活のなかで捉えることが課題であった。

アルタイ山中および北麓にいるザハチン、ウリヤンハイ、オーロド、ドゥルベドの4集団を中心に聞き取り調査をおこなった。調査ルートは、ホブド市を出発して、ザハチン集団の多いマンハン郡に到着し、そこから険しい山道を走って、山奥にあるウリヤンハイ集団の集住するムンフ・ハイルハン郡とドード郡を訪れた。その後、オーロド集団の多いエレデンプリン郡を訪ねた。ホブド市に滞在後、ホブド県からオブス県へ移動し、オブス県内のトゥルゲン郡へ赴き、ドゥルベド集団を訪れた。

4集団のいずれにおいても、「トーリ」と呼ばれる英雄叙事詩は日常生活においてほとんど聞くことのないものになっていた。以下、簡単にその状況を述べておく。

マンハン郡、ザハチン集団のもとでは、2007年現在、民謡による男女間の掛け合いがおこなわれている。しかし、トーリ（英雄叙事詩）の語りについては、外国人や研究者

たちが頻繁に尋ねてくるウリヤンハイ人のトーリチ（叙事詩の語り手）を知っているだけで、ほとんど演芸としてのトーリしか聞いたことがないとのことであった。

ウリヤンハイ人の住むムフ・ハイルハン郡に行く途中では、「トーリ」について訊ねても若い世代は知らなかった。年配の人は、トーリのことを「我々はトゥージという」と言いながら、ほとんど聞けなくなったとのことであった。

ムフ・ハイルハン郡の中心地では、演芸センターの責任者を通じて、地元の長老たちに引き合わせてもらったところ、彼らはアルタイ・エゼンに対する信仰については語る事ができたが、トーリについての情報は得られなかった。

ドート郡までの道中では、アルタイ・エゼンに対する日常的な信仰行為について老若男女を問わず語り伝えていた。また、来客があると、皆で集まって乳酒の杯を回して民謡を楽しむ。しかし、トーリについては、父が著名な語り手であっても、子の世代に伝承されていなかった。ウリヤンハイ人のなかでは、アビルメッドやセセルという著名なトーリチがいる。前者は、ドート郡出身だがすでに死亡し、その子孫たちがトーリチを継承していた。なお、子孫のうちの一部はホブド市演芸団の一員となっており、トーリ（英雄叙事詩）という口承文芸がもはや日常生活からは切り離されたパフォーマンスになっていることを示している。

エレデンプリン郡のオーロド人は演芸センターでしかトーリを聞いたことがないと言う。

オプス県トゥルゲン郡のドゥルベド人のあいだでは、著名なバルチンというトーリチの死後、後継者がなかったため、現在、スイスの支援を受けたプログラムによって、次世代の育成が試みられている。

以上のように、英雄叙事詩という口承文芸は、生活の現場で維持されるものではなくなっている。

## 2.2 2008年の調査概要

2008年8月21日から9月20まで研究調査は、前年に調査しなかったトルグードに焦点をあて、モンゴル国アルタイ山地区のブルガン郡でおこなった。すでに、前年の調査によって、当該地域ではもはや英雄叙事詩が生活のなかで維持されていないことを考慮して老人による一般的な口頭伝承に注目することとした。

偶然に出会った人たちから、地元で尊敬されている老人を紹介してもらうという方法によって、68歳から88歳までの男女8人にインタビューをおこなった。さらに50代の男性も1人加えて合計9人の語りを集めた。

インタビューは、一般に半構造化手法で実施されることが多い。今回の調査においても、出身地、両親、兄弟、所属の氏族や集団の経緯など、定型的な質問だけを用意して、話の導入部とした。老人が語りやすいように、インタビュアーである筆者がインタビュ

イーの家庭を訪問し、彼らの日常的な生活空間で話を聞いた。しばしば、他の人びとが集まっているので、彼らも巻き込んで自然に話を交わしながら、自由に語ってもらうよう努めた。その結果、個人の体験談については、特異な経験についての思い出が印象深く何度も語られ、8人全体にわたって質と量に大きな違いがみられた。最も長く、最も詳しく語られたのが、88歳のノースタイ氏である。

ノースタイ氏の語りについて紹介するに先立ち、9人の語りを総合して、以下に、ホブド県ブルガン郡の概要を述べて、テキストの理解に資しておこう。

ブルガン郡はホブド県に属するが、万年雪をいただくムフ・ハイルハンが障壁となっており、北麓にあるホブド県中心地から離れている。ブルガン川の下流が郡内を貫流しており、郡の名称はこの川に由来する。

現地の人びとの話によれば、ブルガン郡の下位に5つのバグという行政区が置かれ、それぞれアラグ・トロゴイ、バヤン・ゴル、バヤン・スダル、バイタグ、ダラト、プリン・ハイラハンという。

これらのバグは、基本的に各集団が慣習的に利用してきた牧草地に設置された。アラグ・トロゴイはバンギン・トルグード集団の、バヤン・ゴルはホシュド・トルグード集団の、バヤン・スダルはカザフ集団の、バイタグはベーリン・トルグード集団とホボグサイリン・トルグード集団の、ダラトとプリン・ハイラハンは中心部に位置し、ベーリン・トルグードとバンギン・トルグードたちの牧草地であるという。

カザフを除いて、バンギン、ベーリン、ホシュド、ホボグサイリンという4つがモンゴル系集団である。これらの集団名の語尾にある「ギン」あるいは「ン」は日本語の「の」という所有格を表すため、それぞれバン（親王という爵位のこと）の、ベーリ（貝勒という爵位のこと）の、ホシュド（民族名）の、ホボグサイリ（地名）の、トルグードの意である。

当該地域では、一般に「故郷」を意味する「ヌトック」というモンゴル語をしばしば「人間集団」の意味で用いる。複数の集団が住み分けているという歴史的経緯が反映されているのかもしれない。

ブルガン郡の人びとは、こうした自分の所属を明確に認識している。たとえば、ベーリン・トルグードのバイタン・オボグ（姓）、ホシュド・トルグードのハターマド（姓）というように、集団名と氏族名が記憶されている。

「バンギン」という語は「バンガハン」とも言われ、ともに「ワンギン」すなわち「王の」という意味である。つまり、バンギン・トルグードは「王」のトルグードという意味である。同様に、ベーリン・トルグードとは「貝勒」のトルグードである。両者の領主は兄弟であり、それぞれ「親王（王）」と「貝勒（ベーリ）」の爵位を与えられたため、その配下の人びとが、それぞれそのように爵位を用いて呼ばれてきた。

ホシュドとは本来、トルグードと並ぶオイラト諸集団の1つであり、トルグードの下

位集団ではない。ホシュドの一部が18世紀末、清朝によってトルグードとともにアルタイの東南側に移住させられた。この移動してきたホシュドの一部とトルグードの関係について、現地では、「ホシュドに嫁いだトルグード人の女性が、嫁ぎ先のホシュドをつれて実家を頼ってきたことに起源する」と伝承されている。この一部のホシュドの初代リーダーはトルグード人の女性であったため、ホシュドは多数派のトルグード集団に従属する立場に置かれ、その結果、現在、ホシュド・トルグードと呼ばれている。

ブルガン郡におけるホボグサイリン・トルグードとは、中国新疆ウイグル自治区のホボグサイリから移住して来たトルグード集団を指す。彼らが初めて自発的にブルガン川流域に移ってきたのは1935年ごろのことであるという。チュETTEケというホボグサイリ出身の男性が、モンゴル国の革命のために活躍し、のちに親戚5戸を故郷からモンゴル国へ呼び寄せたという例がある。チュETTEケは聞き取りをした1人の老女の親戚である。また、1944～1945年にかけて2回にわたって数世帯のトルグード人が自発的にホボグサイリ地方からブルガン川流域に移ってきた。聞き取りをした3人の老女たちはまさにホボグサイリからの移動を体験した。

以上のように、現地での聞き取りによれば、ブルガン郡におけるモンゴル人は4つの集団から構成されている。このうち、ホボグサイリのトルグードは、彼らが帰依していた活仏が中国領内にとどまったため、ブルガン川地域にオボアの聖地を設けていない。他の3つはいずれも慣習的に認められた牧草地をもち、そのシンボルとしてダシワンジル山、プリン・ハイラハン山、バヤン・ゴル川に、それぞれのオボアを祭っている。

ブルガン郡の中心地は、プリン・ハイラハン山麓にある。この山はブルガン川流域の「土地の臍」と見られ、敬われている。この山を中心とし、西側に役所が置かれ、川沿いに建物が立ち並ぶ。町の中心部は川上に位置し、並行した2つの街をもつ。1つは市場であり、もう1つは市役所、銀行、旅館を中心した、一種の官庁街である。市場には薬屋、床屋、飲食店、雑貨店、アイスクリーム店などが並び、商店は80軒を数える。これらの建物は土レンガでできている。

一般にモンゴル国の諸地域と同様に、中心地に住む役人や商人たちも、自分の家畜群を持ち、手元に少数の家畜を置いて日常の乳や肉を確保したうえで、家畜の大半は草原部に住む親戚や知人に放牧を委託する。

バンギン・トルグードの遊牧民たちが最も多く集まっているのは、ヤマントというところである。ヤマントは郡の中心地より川下に位置し、冬営地としてここに15戸の遊牧民が住んでいる。ノースタイ氏（以下、敬称略）もこのあたりで遊牧していた。

### 3 ノースタイの語りの概要

本書では聞き取りをおこなった9人のうち、ノースタイの口述資料を提示する。この

資料は2008年8月29日から9月4までブルガン郡におけるヤマントという地方のブルガン川畔でノースタイという老人にインタビューしたものである。インタビューは総計9時間に及んだ。本書では、インタビューの資料をローマ字テキストに転写したうえで、日本語訳を付した。

### 3.1 生活の概況

ノースタイは妻をなくし、子どもを持たない独身の老人で、成人したツェレンジャブを養子にもらった。ノースタイは、自分の所有する家畜をツェレンジャブに分け与えて、独立した家を持たせ、自分はそばに住んで面倒を見てもらっている。ツェレンジャブ夫婦には、3歳の養女がいる。また、ノースタイのそばにツェレンジャブの妻の姪にあたる少女がいて、日常生活の世話をしている。彼女はシャラオキンと呼ばれ、小学校は中退した。

また、ムンヘバートルは、ツェレンジャブと同じように養父に育てられた。彼の養父はノースタイの実兄であって何年前に亡くなった。ムンヘバートルの妻はホロロといい、夫婦2人とも40代で3人の娘と1人の息子を持つ。

本調査期間である8月末から9月の初めにかけて、遊牧民たちは徐々に夏営地から秋営地に移ってくる。秋営地は冬営地の近くで、川岸にある。ムンフバートルの一家は、降雪を待って山をのぼり、小型家畜（羊と山羊）を、雪に依存して放牧する。一方、ツェレンジャブはヤマントの冬営地に移動し、大型家畜を担当する。

このように、ムンヘバートルとツェレンジャブらは養父が兄弟であるために、従兄弟として助け合って放牧する。聞き取りに際しては偶然に同席したムンヘバートルがしばしば質問者役を自然に代行した。

ノースタイは彼ら2世帯にとって家父長的な存在であると同時に、地域社会全体にとって長老格である。

### 3.2 語りの経緯

2008年現在、ノースタイは88歳でバンギン・トルグード出身である。ノースタイは語り部と称されないが、彼は語り的高手な人として老若男女を問わず地元でよく知られている。調査期間の初期、数人がノースタイの名前を上げたため、彼の所在地を聞いて、直接、彼の宿営地を訪問した。

ノースタイ宅を訪問したのは夜のことであった。訪問の趣旨を伝えるや否や、たちまち彼は人生譚を語り始めた。彼にとって、昔のことをどこから何を話すかは用意してあるかのようであった。周囲の人びとは彼の話をすでによく知っているのだから、そばからあの話この話といったヒントを与えるとノースタイは次々に語っていく。最初の1晩をそのように過ごした。それから、1週間、ノースタイ宅に通った。

調査期間中は、草刈りの繁忙期に相当したので、折を見ながら、語りを採録した。  
 ノースタイによれば、母が生きいていたらもっと詳しく話してくれただろう、という。また、ノースタイの兄も彼に劣らず話しの上手な人だったと、養子のムンヘバートルはいう。

語りをまとめてみると、守護神、集団史、個人史の3つに分類できる。この分類に基づいて、テキストを構成した。第Ⅱ部、第Ⅲ部ともに、ことからの生起した年代順に並べかえた。あらすじは表3にまとめて提示した。

ここで集団史と分類したものには2種類ある。1つは、彼が母たちなどから伝え聞いた話を指している。彼が物心つく以前の話である。もう1つは、11歳で母たちと再会して以降の、自身の経験譚のなかで、他の人から伝え聞いたものである。すなわち、第Ⅱ部と第Ⅲ部の分類は、伝聞と経験によっている。もちろん、第Ⅲ部の個人史も集団の歴史と大いに関係していることは言うまでもない。個人的な経験譚からも集団史を看取することは十分に可能である(3.3後半参照)。

### 3.3 ライフヒストリー

ノースタイは貴族の出自である。母方の祖父はバンギン・トルグード集団の領主の親戚で、書記に就いていた。1920年ごろ、この実父が病死し、1921年、ノースタイは現在の中国新疆ウイグル自治区内にあるツァガン・ゴルというところで生まれた。兄弟2人とあわせて3人の子どもを連れ、母は、領主の家臣と再婚した。

当時の領主は、アープ・ノヤン「父なる領主様」と呼ばれ、ノースタイ一家は、この領主のそばにいて、現在のモンゴル国ホブド県ブルガン郡内にあるダシワンジル山あたりに住んでいたという。

領主を世襲したアニヤ・ノヤンはカザフ人と仲良くなり、これを嫌った前領主のアープ・ノヤンは1927年、40人の家臣たちを連れて、仏教の聖地だといわれている中国内のイジンマジン(仏教の聖地)へ行った。ノースタイの継父も、母たちを無理やり連れて領主と同行した。このとき、ノースタイはホシュド人の寺院に預けられていたため、家族と離ればなれになった。

1929年、9歳のとき、預けられていた先の師匠が死んで孤児となり、こんどは俗人の伯父に預けられた。ノースタイは伯父の家から2度も逃げ出し、アープ・ノヤンの息子ヨンゴの家に住んだり、牧夫の家で暮らしたり、母の知人たちに助けられたり、キャラバンの漢人たちに救われたりした。

アープ・ノヤンはイジンマジンで死亡したため、ノヤンの周辺にいた家臣たちの集団は故郷への帰還を考えた。ノースタイの母は、まず1人で駱駝に乗って先行し、回族との戦場を通過して、親戚のアムルジャヤに援助を求めた。こうして1931年、ノースタイは11歳で、ラサから戻って来た母親とチョンジ(昌吉)で再会した。



1932年、12歳のとき、家族と一緒にバンギーン・トルグート集団の移動にともなってチョンジからブルガン川流域へ移動する途中に、中国領内に戻った。母は、一家を連れて、以来14年間、現在の昌吉回族自治州吉木薩尔県あたりで、ウイグル人や漢人に雇われて生計を立てた。領主はチャグダ・ノヤンに代わり、ノヤンの周辺の集団もまた、ダシワンジル山へ移動したもののカザフ人に襲撃され、雪害に遭遇し、中国領内に戻った。

1944年、申年、24歳のとき、領主がゴンボ・ノヤンに代わると、新しい領主は随伴集団を放棄して逃げ去った。そこで残された集団は、ツォーホル（あばた）と呼ばれる老人や僧侶たちに先頭されてバンギン・トルグード集団としてダシワンジル山麓のヤマント地方へ帰還した。移動の際、グループというモンゴルの革命組織に助けられた。そして、ノースタイ自身も革命組織に徴兵されて、カザフ人や回族軍閥との戦争を経験した。

1945年、25歳で学校に通い始めたが、学習を放棄した。26歳で結婚し、兄と家畜を分け合った。ノースタイ夫婦はわずかな私有家畜と人びとに頼まれた家畜を放牧し、アルタイ山の野生動物を狩って生計を立てた。結婚後、2年間はバインソダルというところで穀物を栽培した。畑から収穫するばかりではなく、ネズミの穴を掘って、ネズミが越冬のために集めている穀物を横取りし、キャラバンに売って数頭の家畜を手に入れていた。

その後、1949年から6年間、一般の富裕な遊牧民の家畜を預かって放牧していた。1955年、現地にネグデル（牧畜協同組合）が成立してから3年目に、ノースタイ自身もネグデルに加入した。同年に彼も含めて3人がメンバーになったという。このころ、カザフ人とのあいだで草地の奪い合いなどがあった一方で、カザフ人にフェルト製の靴下や銃弾を与えて家畜を入手することもあった。

その後、18年間組合の家畜を放牧した。当時は、3ヶ月請け負って、食肉、乳、毛皮を供出し、7万トゥグリグの給料をもらったという。

1973年、妻が亡くなったため、組合の家畜を返却した。仕事をしなければ私有家畜に徴税すると言われたので、54歳から57歳まで、ロシアに輸出する家畜を国境まで届ける仕事に就いた。その後、ツェグという部局に派遣され、病気などで処分される家畜の骨、毛皮、腸を回収する仕事に任じられ、1年間の給料として15万トゥグリグをもらった。

1980年、60歳のとき、ツェグの仕事を辞めて帰ったが、警備長に呼ばれてアラグ・バグで警備員になり、翌81年、61歳で退職した。

1982年から2008年（調査当時）まで27年間、年金生活を送っている。退職したノースタイは1人暮らしをしており、養子一家とともに暮らしている。

### 3.4 歴史的背景

ノースタイは2008年現在で88歳、かつ酉年生まれであると告げており、1921年生まれと判断される。一方、モンゴル人民共和国は1921年に成立しているの、ノースタイの

人生は、モンゴルの社会主義化とその放棄という歴史とほぼ重なっている。

ノースタイの語りには、歴史的な背景として大きく2つの内容が含まれている。1つは1911年のモンゴル独立宣言以降、封建領主に率いられたバンギン・トルグード集団の越境移動およびカザフ集団などとの衝突など、対外的な歴史である。もう1つはモンゴル国内における社会主義建設という歴史、いわゆる社会主義的近代化である。以下に、ノースタイの語りを歴史的に位置づけるため、当時の社会情勢を解説しておく。2つの側面のうち前者を「越境」と「戦い」にわけ、3つの側面として解説する。

### 3.4.1 国家の建設と人びとの越境

20世紀初頭、アルタイ山脈の西モンゴル諸集団は清朝の新しい政策によって行政区分上新たに編成された。その結果、ブルガン川流域のトルグードの2つのホショー（旗）、ホシュドの1つのホショー（旗）、ウルング川湾曲の農耕地、アルタイ・ウリヤンハイの7つのホショー（旗）、そして、アルタイ山脈南北に移動してきたカザフ人は「アルタイ辺界区」という新しい行政区に再編入され、行政庁の所在地がシャラ・スムに設けられてホブド辺界区と並存した（Нямдорж 2006：42）。シャラ・スムとは、黄色の寺を意味するモンゴル語の地名であるが、中国では承化寺<sup>1)</sup>と呼ばれる。モンゴル国と中国の国境線が定まる以前、ブルガン川流域のトルグード集団はシャラ・スムを中心地にウルング川流域を含めた地域を自由に往来した。

1911年、辛亥革命が起り、清朝の支配から離脱すると、モンゴルは独立を宣言して共戴モンゴル国という新しい政権を樹立した。共戴とは、チベット仏教の権威とチンギス・ハーンの権威の双方を戴くという意味である。1912年の初め、共戴モンゴル国政権は、西部に国防機関を設け、首相のジャルハンズ・ホトクト活仏を鎮撫使として派遣した（Нямдорж 2006：69-71；モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（1969）-1：158）。彼の赴任後、西モンゴル諸集団の王公たちは次々と共戴モンゴル国政権を認めると意思表示をおこなった（Нямдорж 2006：79-80）。しかし、共戴モンゴル国の政権指導層に西モンゴルの人は1人もおらず（Бурдуков 1987：117-118）。西モンゴル地域は、国境問題を抱えており、共戴モンゴル国政権に完全に統治されたわけではなかった。

たとえば、カザフ人の集団は、1870年代から徐々にモンゴル領土に現れ、1912年の時点でハラン、ジュンヌバイらをリーダーとする400戸のカザフ集団が共戴モンゴル国政権の配下に入ることを承認したにもかかわらず（Нямдорж 2006：80）、一部の強盗がアルタイ、ホブド、ウリヤスタイ一帯でモンゴル人を襲っていた（Бурдуков 1987：97-98）。

国境については、1913年の中国・ロシアの交渉により、行政区域を確定せずに保留されたが、それ以降、基本的に同年の軍事駐屯境界線に基づいて、奎屯山、アルタイ山、ブルガン河以西は中国領域として認識されることとなった（陳 1939：74,162）。したがって、1913年以降、アルタイ辺界のシャラ・スム、ウルング川、チンギル河地域は中国

領域として実質的に確定したが、しばらくのあいだ、モンゴル国西部諸集団はアルタイ境界区を往来した。

こうした事情を背景に、ブルガン川流域を拠点とするトルグード集団の親王ミシグドングルブは、中国新疆地方との関係を維持していた。そのため、ミシグドングルブは共戴モンゴルの政府から非難され、1913年5月に部民を連れて国境近くのバイタグ地域へ移動し、中国新疆地方の政府に牧草地を求めた結果、フユアン県<sup>2)</sup>のセチンホーというところを一時的に与えられた (Oirad-MongGol-un tobci teūke bicikū tasuG 2000 : 375)。

1921年、モンゴル革命運動家たちはジェブツンタンバ・ホトクト活仏を首長にするモンゴル制限君主制新人民政府を樹立した。このモンゴル人民革命党の臨時政府は、西部の諸集団に対して政権闘争を指導し (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969)-1 : 141), 1921年7月、マクサルジャブなどの活躍により、西モンゴルにも地区政府が樹立された (磯野 1974 : 180-181)。

1921年11月、ソ連・モンゴル相互友好条約が調印されると、ソビエト赤軍は正式にモンゴル人民党義勇軍と連合し、封建領主や外国侵略者の勢力一掃をはかった。

1922-1924年、モンゴル全国で人口、家畜の調査が実施され、郡やバグなど下位行政区が設けられ、商業、工業、牧畜、耕作、林業を統轄する経済省を新設するなど、旧来の体制が刷新された (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969)-1 : 205)。旧来の勢力を弱体化させるため、領主の世襲が廃止され、隷属民が解放され、遊牧民が所属する領域を越える移動が自由になった (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969)-1 : 198-202)。

1924年11月に開催された第1回国家大会議において、国家憲法が承認され、モンゴル人民共和国の建国が宣言された。ここに、ソ連に続いて世界で2番目の社会主義国が誕生した。地方行政に対しては、1927年、旗長たち向けのセミナーがおこなわれ、地方行政機関の新たな組織化が推し進められたが、アルタイ地区のウリヤンハイ、カザフなど少数民族の地方行政を確立する活動は遅れていたとされている (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969)-1 : 257-258)。遅延の要因として、国境地帯に居住する集団が越境して往来することが指摘されている (モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 (1969)-1 : 258)。

以上のように、1920年代のモンゴル人民共和国は、領主や僧侶などの旧来勢力を排除して、新たな地方行政組織を建設し始めていたが、西モンゴルとりわけ国境周辺地域には時間差が見られた。ノースタイの語りから浮かび上がる社会は、まさにそうした縁辺地域の具体的な事例にほかならない。

ノースタイの語りでは、親王ミシグドングルブはアープ・ノヤンと呼ばれている。DM300100で、1910年代に王公たちが共戴モンゴル国のホブドと中国領内のチョンジ<sup>3)</sup>、ウルムチ、内モンゴルのフフホトのあいだで交易をおこなったことがうかがわれる。ま

た、DM300080(1), DM300082(1) では、1920年代にバンギン・トルグード集団が中国領内のツァガン・ゴル、チョンジと、モンゴル国領内のブルガン川地域のバイタグ、ダシワンジルのあいだ往来していたことがわかる。DM300081(1) では、中国のサントイ<sup>4)</sup>地方のショールンク<sup>5)</sup>が中国からバンギン・トルグードに与えられた領地であることが言及されている。DM300116(2), DM300080(5), DM300080(6) を見ると、1927年頃、バンギン・トルグード集団は一部、中国領内の昌吉に住んでいたが、モンゴル側のバイタグにあったホシュド集団が維持する寺院にトルグード人を学習させたりしていた。DM300080(5)(6), DM300116(1) では、1931年までバンギン・トルグード領主の息子ヨongoとその隷属民を含めた一部のバンギン・トルグード集団が、ウリヤスタイやバイタグに住んでいたことがうかがわれる。その後、1944年まで、ノースタイの母の一家を含む一部のバンギン・トルグード集団が中国の領内で漢族、ウイグル族、回族、カザフ族たちと混在して暮らしていたことが、DM300153, DM300154, DM300155(1)(2), DM300085(1) で確認される。

DM300080(1) でアーブ・ノヤンの4人の息子の名前が挙げられる。そして、次男の代のとき、カザフ人と野合して略奪をおこない、3男の代のときにはカザフ人からの襲撃に報復したが、次世代の代になると集団が消滅した。DM300095(1), DM300100, DM300080(4), DM300156(2) で比較的詳細に言及されている。これらの内容は、1920年代から1930年代にかけて実施された王公に対する諸政策の結果であると同時に、ロシア人A. B. ブルドコフ(Бурдуков 1987)が描くモンゴルとカザフの摩擦の、具体例であるといえよう。

西モンゴル諸集団のなかでもトルグード集団の場合、中国領域内の集団との関係が強かった。さらに、ノースタイ一家は領主たちとともに移動していた。近代国家の成立とともに、旧体制として排除されるべき存在である王公と行動をともにしていたために、牧地を季節的に交換するための季節移動としてではなく、社会変動に対応する移動として国境を往来していたのだった。

### 3.4.2 国際関係と人びとの戦い

1928年のモンゴル人民党第7回大会の決議により、私有財産が没収されることとなった。1930年になると、中・下層遊牧民や寺院の所有する家畜群を協同組合に強制的に加入させるという運動が進められた(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988(1969)-1:302)。この急激な政策の結果、1930-1932年のあいだに、1万人を越える人たちが南や西のモンゴルの領地から脱出し、また西部において数千人の武装蜂起が起り、政府は15回の戦いで反乱を鎮圧した(バトバヤル 2002:49-52)。こうした国内の反乱は、国際的な支援と結びついているため、人民革命党と政府は、辺境の諸県への投資を強化する一方、国境警備体制を強化した(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988(1969)-

1 : 307)。とくにモンゴルとカザフの集団の越境については厳しく監視していた。カザフ人のモンゴルへの入境は、1931年にハミで起きたムスリムの反乱をきっかけに激増し、モンゴル側が監視していた（松原 2011 : 28）。

1931年、清朝の名残をとどめていた5盟ないし県72旗525郡の地方行政区画が、13県324郡に改編された（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（1969）-1 : 288）。ブルガン川流域のトルグード集団のためには、ホブド県ブルガン郡が設置され、辺境の国防が託された。こうした国防態勢は、1940年代に入ると、単に国外からの混乱要因を排除するばかりでなく、積極的に隣国の民族紛争へ介入する形をとるようになる。

例えば、モンゴルのブルガン郡に隣接する中国のチンギル川流域において、オスマン、デレリカンらカザフ人の民族主義運動が展開したとき、ソ連および外モンゴル（モンゴル人民共和国）は積極的に支援した。1943年、オスマンはソ連から武器を購入し、外モンゴルが自ら積極的に友好関係を結んで、武器を供与したのみならず、避難地と訓練基地と遊牧地を提供していた（王 1995 : 181）。また、1943年、44年と中国国民党側が大兵を率いてモンゴルの西部国境から侵入すると、モンゴル国境警備軍が反撃した（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（1969）-2 : 51）。

1946年にモンゴルと中国のあいだで外交関係が樹立されたにも関わらず、中国軍閥はモンゴルの西南部国境バイタグ・ボグド付近から国境侵犯を繰り返していた（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（1969）-2 : 70）。

ノースタイの語りと照合すると、DM300091, DM300092, DM300116(2) では、越境して逃亡するバンギン・トルグード集団の領主、その家来、およびばらばらに脱出する遊牧民たちの様子が見受けられる。DM300080(3), DM300116(2) では、1931年頃、モンゴル兵がハミあたりで回族と戦ったという。ここで言及されるモンゴル兵はグループと呼ばれなかったため、革命党政府と関係がなく、いわば領主の私兵であると思われる。先に言及した1931-34年のハミでのムスリムの反乱であろう。DM300080(4) では、この時期、バンギン・トルグードの領主はチャグダ・ノヤンに代わり、チャグダの兵隊は回族の勢力がチョンジ、ウルムチを占領し、サントイを攻撃したとき、ソ連兵に撃退されたため、彼らの大砲と鉄砲を入手したという。ソ連・モンゴルの友好条約が、軍事上で機能していることがわかる。

DM300156(3) によれば、1944年にバンギン・トルグードがモンゴル国へ戻る際、グループとよばれる兵たちに助けられている。また、DM300142(1) でノースタイたちはブルガン川流域に戻ったとたん、グループに徴兵されて戦闘に加わっている。ここに登場する「グループ」という組織名は、一般に人民革命党が成立するまでの革命初期の組織として知られている（ツェデンバル 1978）。1921年以降、しかも地方に広く、この語を確認することはできない。革命青年同盟という組織を指しているかもしれない（カリニコフ 1939 : 164-165）。いずれにせよ、中国領内へ出ていたトルグードをモンゴルへ

帰還する動きが現れている。

DM300082に、モンゴルへ転入した1944年の冬、カザフ集団と中国の戦争が起こったというのは、まさにオスマンに率いられたカザフ集団の民族独立運動のことである。オスマンたちがモンゴルから武器を供与されていたことはDM300142(2)の語りでは、地元の長老が国策に反対して元帥と直談判をしたという伝聞を含めて再現されている。DM300123, DM300142(1)でも、僧侶の逃走に際して、モンゴルが、カザフ集団への対応を中国側と交渉しているさまが看取れる。オスマンたちの略奪行為についてはDM300142(4)などに詳しい。そこには、カザフ集団が馬群を強盗したりしてモンゴル遊牧民たちの生活に緊張感をもたらしていたことが、ノースタイ自身の経験として語られている。

甘肅から新疆まで勢力を伸ばした回族の馬仲英の勢力は、モンゴル人民共和国と国境を接しているジュンガル盆地の東端部に出没した(松原 2011:27)。馬仲英軍の新疆地方への転戦は1934年に頂点に達し、馬仲英自身が1938年に絶命した(松原 2011:23)。DM300142(2)によれば、マジュンインのホイホイ(回族)兵隊は、モンゴルに侵入し、バイタグ地方で砦を造った。1930年代前半のことである。その後、この砦はオスマンたちが占領し、モンゴルとソ連の連合兵と戦ったことも語られている。

以上のように、1930年代前半の馬仲英や1940年代のオスマンの動きに連動して、モンゴル人が国境守備の名目でソ連と協力し、中国と応戦していた実態がノースタイの語りに現れている。

### 3.4.3 社会主義の建設と人びとの生活向上

1932年からモンゴル人民革命党は、急激な集団化を改め、海外逃亡者の帰省の援助、僧侶や寺院の名誉回復などをおこなった。(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988(1969)-1:319)。国営農場など急激に集団化した組織をひとたび解体しながらも、集団化に関する政策そのものは廃止せず、一般的な牧畜協同組合の形態を発展させることになった(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988(1969)-1:323)。農牧業におけるネグデルや、国営農場、機械・草刈りステーションといった組織がそれぞれ1935, 36, 37年に誕生した(モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988(1969)-1:362-363)。

1934年、経済政策が成功したとみなされるようになると、モンゴル人民革命党は反宗教活動を強化し、1937-1938年のあいだにほとんどの寺院が破壊され、数多な仏教の高僧が殺害された(バトバヤル 2002:57)。ソ連のスターリン時代の大粛清と並行して1937-1939年におこなわれた大粛清は、モンゴルの場合「国を危機にさらす日本の協力者の大陰謀」を根拠にした赤色テロであった(バトバヤル 2002:58)。

第2次世界大戦後、1940年代末からモンゴル人民共和国は内政が安定し、社会主義の建設が本格的に始まる。社会主義的な生産組織は、2つの段階を踏んで進められた。ま

ず、1948-1960年の第1次5ヵ年計画（1948-1952年）、第2次5ヵ年計画（1953-1957）、国民経済のための3年計画（1958-1960年）を遂行した。その後、社会主義建設完成の段階に入り、第3次5ヵ年計画（1961-1965）を実行した。

とくに遊牧民を集団化するネグデルの建設は政策の中核であった。1958年、モンゴル人民共和国の全国の郡にネグデルが設立され（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988（1969）-2：120）、1959年末には、遊牧民の組織化が100%に達したとされた（小貫 1993：237；シレンデブ 1977：158）。各ネグデルは、生産組織であるばかりでなく、政治・経済・社会・文化・科学の全領域において、画一的な社会主義文化を全国に普及する手段として機能した（風戸 2009：75）。こうしたネグデルの体制は1991年まで続き、解体され、各世帯で市場経済への移行を模索した。

ノースタイの個人経験談によれば、1944年、ノースタイの母一家はブルガン川流域に移動してきたとき、各種の家畜を合わせて500頭以上所有していたが、雪害で喪失したことがDM300081（2）、DM300155（3）から知れる。一般に「申年の雪害」といわれる、まさに申年に起きた雪害であった。

雪害のあと、学校教育の普及やソ連からの小麦粉の輸入など地域社会の発展のようすがDM300085（3）、DM300085（5）、DM300141（3）で語られている。ネグデルのメンバーになるまでは、地元の人びとの家畜を放牧し、DM300087（2）からは、3ヶ月の賃金として1頭の山羊か羊とほんの少しの轉茶などをもらっており、当時の具体的な経済関係がわかる。

正史でしばしば言及されるような、農地の拡大や機械・草刈りステーションの建設がDM300085（5）で確認される一方で、ノースタイの語りに顕著なのは、1940年代から50年代にかけての、医療行為、物々交換、狩猟の補助経済など、こまごまとした生活実態である。DM300115、DM300121（1）に現れる。とくに穀類と家畜の交換基準は具体的である。

チベット仏教寺院の経済基盤となるジャス（本テキストではジャズ）は、一般に1930年代に解体され始めたが、DM300141（2）では、ノースタイ自身の経験として1950年代初めまで当該地域では存在していた。

DM300141（2）によれば、ブルガン川流域では1953年にネグデルができ、3年目の1955年にノースタイは加入した。貧富の入れ替わりや貧富の均衡化といった言説で加入が勧誘されていたことがわかる。そのほか、DM300127、DM300087（1）、DM300164、DM300165にネグデルの様子がうかがわれる。これらの話では、彼自身が豊かになったことを実感として語られている。

興味深いことに、ネグデルに関する話では、本人の妻のほかに、他の登場人物の妻もよく登場しており、放牧における男女の分業が明瞭である。そして、ノースタイ自身がネグデルを離脱する契機は妻の死亡であった。ネグデルが、生産にかかわらず生活のあ

らゆる側面にかかわる社会単位である一方で、ネグデルの単位は個人というよりも実質的には家族少なくとも夫婦でなければ生産単位として機能しにくかったことが確認される。妻の死後は、家畜の輸出など遠隔地へ放牧する仕事に任命されており、そうした職務に対しては単身者が社会的に配置されやすいようである。

以上のように、ノースタイの経験譚は、当該地域における社会主義建設の地域史を映し出し、とくにネグデル化が始まる以前の状況に詳しく、政策史としくに記録されることもないであろう詳細な実態まで示している。

語りの内容を理解するために、歴史的背景を知っておく必要はあるが、歴史的事実を抽出するために語りがおこなわれたわけではない。あることならについて、どのように表現されているかという言説の分析は、今後の課題としたい。

## 注

- 1) 現在の中国新疆ウイグル自治区アルタイ地区アルタイ市にあり、地方の行政庁の所在地である。
- 2) 現在の中国新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州吉木薩尔県。
- 3) 現在の中国新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州およびその中心地にあたる。
- 4) 現在の中国新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州吉木薩尔県三台鎮。
- 5) 現在の中国新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州吉木薩尔県大有郷小龍口村。

## 引用文献

磯野富士子

1974 『モンゴル革命』中央公論社

王柯

1995 『東トルキスタン共和国研究 中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会

小貫雅男

1993 『モンゴル現代史』山川出版社

風戸真理

2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる』世界思想社

カリニコフ, A. (服部斐生ほか訳)

1939 『外蒙古』生活社

シレンデブ, V. (松田忠徳訳)

1977 『資本主義を飛び越えて モンゴルの歩み』シルクロード

陳崇祖 (古川園重利訳)

1939 『外蒙古独立史』生活社版

ツェデンバル, Yu. (新井進之訳)

1978 『社会主義モンゴル発展の歴史』恒文社



バトバヤル, Ts. (葦村京ほか訳)

2002 『モンゴル現代史』 明石書店

松原正毅

2011 『カザフ遊牧民の移動 アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953』 平凡社

宮脇淳子

2002 『遊牧民の誕生からモンゴル国まで』 刀水書房

モンゴル科学アカデミー歴史研究所 (二木博史・今泉博・岡田和行訳・田中克彦監修)

1988 (1969) 『モンゴル史 1・2』 恒文社

Oirad-MongGol-un tobci tetüke bicikü tasuG

2000 《Oirad-MongGol-un tobci tetüke》 (degedü dooradu debter) Sinjiyang arad-un keblel-ün qoriy-a  
(モンゴル語『オイラト・モンゴル簡史』)

Баасансүрэн, Т.

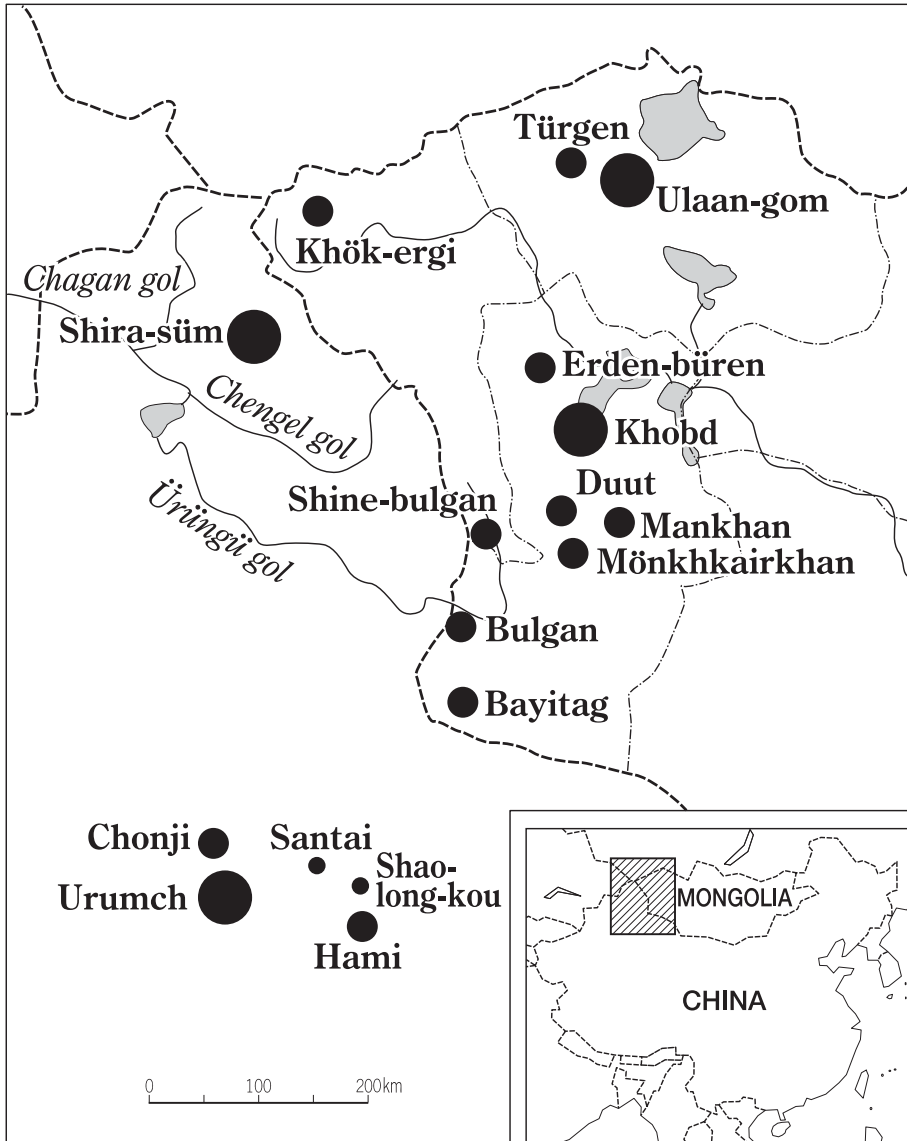
2002 “Ховд аймгийн хураангуй толь бичиг” Улаанбаатар. (モンゴル語『ホブド県簡略事典』)

Бурдуков, А. В. (Э. Базаржав 訳)

1987 “Хуучин ба шинэ монголд” Улсын хэвлэлий газар Улаанбаатар. (モンゴル語『古いモンゴル  
と新しいモンゴル』)

Нямдорж, Б.

2006 “Ховдын хязгаар 1911～1919 он” Улаанбаатар. (モンゴル語『ホブド境界区 1911～1919年』)



地図 調査地およびインタビューに登場する地方

表1 新疆のモンゴル系諸集団（オイラト・モンゴル簡史 2000下：3-7；宮脇 2002：226-227）

上位管轄機関	下位管轄機関	編成	下位編成	遊牧地域
イリ将軍	ハラシャラ大臣	トルグート南路盟, ホシュト盟	南路盟 4 旗54ソム ホシュト盟 3 旗10ソム	ジョルドス
	タルバガタイ参贊大臣	トルグート北路盟	3 旗14ソム	ホボグサイル
	グル・ハラウスン大臣	トルグート東路盟	2 旗 7 ソム	ジラガラント河畔
		トルグート西路盟	1 旗 4 ソム	ジン河流域
		オーロト左, 右翼	8 旗20ソム	テケス河, クンクス河, ツァラ河, ハス河流域

表2 ホブドのモンゴル系諸集団（オイラト・モンゴル簡史 2000下：37-39；宮脇 2002：226-227）

管轄機関	編成	下位編成	遊牧地域
ホブド参贊大臣	ドゥルベト左翼盟	11ソム	ウランゴム地域
	ドゥルベト右翼盟	3ソム	ウランゴム地域
		ホイト 2 旗	ウランゴム地域
		ザハチン 2 旗	アルタイ・ウリヤンハイ以東, ホブド市以南, ジャサグトハン盟以西, 新疆以北
		ミンガト 1 旗	ホブド市から東へチルガト山, ホブド河
		オーロド 1 旗	サグサイ河以南, プヤント河西畔
		新トルグート 2 旗	アルタイ山南側, ウルング河東側
		ホシュト 1 旗	アルタイ山東南溪谷
		アルタイ・ウリヤンハイ 7 旗	イルティシュ河, ホブド河, チンギル河, ウルング河上流

表3 ノースタイの語りのあらすじ

分類	ファイル名	語りのあらすじ
守護神	DM300101	アルタイ・エゼンのことは人間にわかるものではない。
	DM300156 (1)	パンギン・フレはすばらしい知識人の僧侶たちに引率されてブルガン地方に移動した。ツォホル（まだらの）老人はツォンカバ仏を載せた白い駱駝を引き連れ、他の仏像3体はそれぞれ黒毛の種馬、淡黄毛の種馬、栗毛の種馬に載せて来た。
集団史	DM300082 (1)	母はラムツェレンという。母の父はソラホバヤルという。母の父はアーブ・ノヤン（父なる領主様）の書記を勤めた。母はアーブ・ノヤンの親戚だ。
	DM300100	私の父は22歳で亡くなった。彼はノヤンの書記だった。給料を支給したり、麦、麦粉、布、茶などを輸入したりする役割を担っていた。黄疸の症状の肝炎で死んだ。私は母の胎内だった。母はノヤンの家来と再婚させられた。私は生まれて1歳までアーブ・ノヤンのところにいた。また次代のアニヤ・ノヤンのそばに2年、バイタグ地方に2年いた。6歳のときチョンジに行き、24歳でブルガン川地方に戻った。
	DM300080 (1)	母は語っていた。私は少し覚えている。私はツァガン・ゴールというところに生まれた。アーブ・ノヤンの時代だ。私の父はトメントグトフという。アーブ・ノヤンはすばらしい人だった。アニヤ、チャグダ、ゴンブ、ヨンゴという4人の息子と1人の娘をもつ。ノヤンは100戸の隷属民をもつ。ツァガン・ゴールからダシワンジルに来て、アーブ・ノヤンの息子であるアニヤ・ノヤンの時代になった。私が2歳のときバイタグに、4歳のときチョンジに移住した。24歳でここに戻った。
	DM300095 (1)	アニヤ・ノヤンは一部の強盗者を集めて右翼にした。彼の父は怒り、「アニヤはカザフの茶を飲んで仲良くなった。そのうち死ぬ。執政できるものでない。わがチャグダは執政能力のある者だ」と言って仏教聖地に行った。
	DM300091	私はホシュドのフレーに行き、親戚のもとで小僧になり勉強した。ホシュドのフレーはバイタグにあった。母はチョンジにいた。継父は母を無理やり連れてイジンマジンに行った。
	DM300080 (2)	なぜ母はイジンマジンに行ったかという、強盗する一部の人がいたので、アニヤ・ノヤンの父は「私が死ぬと、バトンガという人は貴方たちを捕まえて中国に出すから今のうち逃げなさい」と言って去った。イジンマジンのノヤンはブルワという人だった。
	DM300092 (1)	母たちはイジンマジンに行く途中に、僧侶が超能力を発揮して雨を降らせた。また、ある婆の住まいに立ち寄り、たくさんの家畜をもらった。
	DM300095 (2)	80歳のアーブ・ノヤンは40人の家来を連れて仏の聖地に行き、ある日家来たちを集めて故郷に帰らせるための押印した書類を渡して亡くなった。
	DM300080 (3)	イジンマジンで継父が死んだ。ここから移住して行った家庭は10戸残った。母の親戚の弟アムルジャヤに率いられた100人のモンゴル兵は回族と戦った。ハミあたりで中国と回族が戦っていた。母はイジンマジンで15戸を集めて故郷へ戻る準備をした。1頭の駱駝に乗って夜走らせた。母の親戚の弟は兵士を派遣して母を出迎えた。彼らの支援により15戸は無事にチョンジに着いた。
	DM300092 (2)	DM300092 (2)
DM300116 (2)	母は1頭のラクダを訓練し暗くなるまで走らせイジンマジンから1人で渡って来た。母の弟は「何月何日に20人の兵士を派遣するから、その谷間に集まって待っていてください」と約束していた。そして、イジンマジンから15戸が移住し、兵士たちに出迎えられた。	
DM300080 (4)	しばらくそこにおいて、後にチャグダ・ノヤンとガチン活仏に率いられてバイタグに移動した。チャグダ・ノヤンは兵隊をもった。回族はチョンジとウルムチを占領しサントイを攻めた。そのとき、回族の背後からロシアが攻撃した。そこでチャグダ・ノヤンの兵隊は大砲と鉄砲を手に入れた。カザフはチャグダの隷属民を殺した。チャグダはカザフの旗を銃撃して警告した。カザフは「アルタイの王チャグダ」を恐れた。そのとき、私は12歳だ。雪嵐に遭ってわが集団はバイタグで家畜と財産を失い、チョンジに戻った。カ	

		ザフ人は仲直りするため12人の兵を送った。活仏は彼らを信じてはいけなと言ひ、チャグダ・ノヤンはカザフ人の兵を殺した。
	DM300081 (1)	サントイ地方のショールンクというところは中国からバンギンに与えた領地だった。そこで数年漢人に雇われ、漢語を覚えた。兄と私は3、4年家畜を商売し、富を得た。
	DM300156 (3)	オスマンの率いるカザフ人に攻撃され、ノヤンと活仏はハラシャラ地方に行く途中、ウルムチに行った。バンギン・フレはショールンクに移動してきて10年経った。チャグダ・ノヤンはチョンジで亡くなった。
集団史	DM300085 (4)	フレはブルガン川地方に移動してきて5年目で解散した。僧侶たちは捕まえたり、還俗したりして、後にチョルトムという還俗した人はバンギン・トルグードの寺院を再建した。
	DM300142 (1)	私は24歳のとき、グループに参加した。私は27、28歳のとき、わがフレの3人の僧侶が逃げるといふ事件が起きた。グループの人びとは追いかけた。
	DM300123	わがフレの3人の僧侶が逃げる途中、2人がカザフ人に捕まって中国の仲介で無事に帰された。このことは後にオーシャが語った。
	DM300142 (2)	チョイバルサンはツォホル老人の助言に耳をかさず、オスマンに銃を与えて裏切られた。オスマンたちはモンゴル兵隊に攻撃され、オスマンが逃れたと、テムルジャンは言った。
	DM300142 (3)	馬仲英の兵隊はバイタグというところで砦を造り、モンゴルを支配しようとした。モンゴルの兵隊とロシアの兵士は、爆弾を落としたりして砦を突破し占領した。
	DM300080 (5)	ホシュドのフレにいた母方の親戚のトブという人のもとへ7歳の私は弟子入りした。そのため、チョンジからバイタグに来た。トブが老死し、私は本当の父の兄であるバトジャブという人に預けられた。私はそこで虐められた挙句、逃げ出した。バイタグを出て夜野宿し、ウリヤスタイ地方のナリンゴルに着いた。夜走り続けヨンゴという親戚の家に着いた。
	DM300080 (6)	バトジャブはバイタグから引越してチョンジの近くに宿営した。私はバトジャブの家にいた。ある日、枯れ木の芯に隠れて逃げ出した。逃げる途中、農地に積み上げた稲草のなかで泊まった。翌日、漢人のキャラバンに助けられてモンゴル人の家に届けられた。ボスムという人の祖父の家だった。彼は私をトル老人の家に届けた。私はそこにしばらくいると、また、バトジャブに捕まえられ、余儀なく元の預けられた家に戻った。その後まもなく母が迎えに来てくれた。4日後、母と私はイジンマジンから帰って来た人たちと合流した。
個人史	DM300116 (1)	私はフレに2年いてバイタグにいるバトジャブの家に預けられた。2ヶ月ほど住んでいると、私は冬のある夕方、トブジャブの家を出てウリヤスタイへ逃げ出した。わがバンギン・トルグードのフレはウリヤスタイン・ゴルにあった。ナリンゴルに遊牧民たちが住んでいた。私はフレの穀物の貯蔵を見張る、背の高い黒肌の婆に助けられて、親戚のヨンゴの家を見つけた。ヨンゴの妻はザハチン人でトジャという。ヨンゴ夫婦は私を可愛がって2ヶ月ほど一緒に暮らした。ある日、ヨンゴの妻は自分の衣装に飾った鈴が落ちたのに気づけなかつたと言ひ、私を殴って大怪我をさせた。恨んだ。私はヨンゴの家の手伝いに助けられてその家を出て逃げ出し、背の高い、黒い肌の婆の家に行った。婆の一家はイジンマジンに脱出するつもりだったようで、私を残して去った。私はヨンゴの家畜飼いの家に行った。そこに3月の羊出産期までいると、また、バトジャブに連れ戻された。ある日、枯れて中が空になった大きな木の根を見つけてその中に隠れた。バトジャブらは私を探したが見つけられずに帰った。私は逃げた。農地の稲草の堆積に入って寝た。その後、私は中国人のキャラバンに助けられモンゴル人の家に届けられた。私は4月までトル老人の家に住んだが、ある日の朝、バトジャブの息子が突然来て私を連れて帰った。母はイジンマジンから戻り、11歳の私を迎えた。

個人史	DM300153 DM300154	母が私を迎えた後、一家はウイグル人や漢人に雇われて10数年も中国で暮らした。ターハイというチャントーに3年使われた。その後、漢人に5年雇われた。母はその給与で兄の結婚式を準備した。雇い主や近隣の人々は馬車を貸したりフェルトをくれたりして生活用品が集められた。兄の結婚式は2日間行なわれた。結婚式後、母はセチンホーの漢人の家に行き、雇用の契約を結んできた。
	DM300155 (1)	私と母は漢人の羊飼いになった。畜舎の奥に私たちの家があった。兄たちはゲルに住んだ。ある日、母はロバに乗って出かけた。夜、母は帰って来て突然、泣き出した。どうしたのかと訊くと、帰宅中、狼に遭ってやっと逃れたという。
	DM300155 (2)	私たちはセチンホーに移住した。6年間漢人の家畜を放牧した。雇い主の漢人に1頭の疥癬病の仔馬、1頭の雌馬、1頭の牛をもらった。また、兄は雇い主に教えてもらって家畜を売買した。母は兄の売買に心配し、商売に出かけたきりの兄を探しに私を行かせた。兄は商売に儲けた。
	DM300085 (1)	母と私は漢人の羊を放牧し、兄と妻は漢人の牛と馬の面倒を見た。私が19歳で、兄が20代のとき、私たちは漢人の家畜を返して、ウルゲン・シリゲというところに住んでいた。そのときから、兄は家畜の貿易をはじめ、150頭の羊を儲けた。こうして、漢人とカザフ人の間に貿易をしていると、わが集団はダシワンジル山へ移動することになって、自分たちも一緒に移住してきた。
	DM300156 (2)	そのとき、私たちはセチンホーに住んで、母は集団の移動のことを事前に知った。兄に雇い主の家畜を返してもらい、移動用の駱駝を用意させた。グループという組織に派遣されたバトという首領は、15人の兵士を連れて来て私たち70戸を移住させるとき、戦争になり、人が死んだ。ゴンボ・ノヤンは途中で妻と子を捨てて逃げ戻った。
	DM300081 (2)	申年の雪嵐の際、わが集団は漢人の地域からこのヤマントに移動してきた。移住してきたとき、70頭あまりの牛、400強頭の羊、40数匹の馬、3頭のラクダをもっていた。雪嵐に遭って半分の財産を失った。
	DM300155 (3)	ブルガン川地方に来たとき400頭の小型家畜、70数頭の牛、40数頭の馬をもった。雪嵐に遭い、家族は家畜を分担したが、行き別れて凍死しそうになった。
	DM300082 (2)	私たちは移住してきた年の冬、ここでカザフと中国の戦争があった。モンゴルも参戦した。4月、中国兵隊は撤収した。グループという組織はハラ・バルチンギン・サラという所で300人の民兵隊を作り、ヘムニグ隊長が率いたが、終戦になってブルガン川に戻った。
	DM300085 (2)	私は24歳のときバイタグで参戦した。銃を撃った。回族の人を殺した。私たちのリーダーはジャムリンという人だ。バンギン・トルグードの優秀な射手ホンゴルが先頭に出て来た中国人の兵士を撃ち倒した。私はロシアのセセルメンドという銃をもった。
	DM300141 (3)	私たちを集めて勉強させた。勉強できる人もいれば、できない人もいた。私は25歳だった。40歳の人もいた。大人はほとんど勉強をやめた。後に学校が作られて子どもたちが入った。私には紙がなかった。子どもたちに1枚ずつの紙があった。
	DM300085 (3)	私は26歳のとき結婚している。バンギン・トルグードの人たちの家畜を引き受けて放牧し、アルタイ山の獲物に頼って生活した。
	DM300142 (4)	私と妻はグンゾーハの牧草地にいた。カザフ人の攻撃に恐れて牧草地を移動した。母は私たちのことを心配して見に来た。遊牧民たちは不安ではらはらした。カザフ人は遊牧民たちの馬を奪って去った。
	DM300085 (5)	私は結婚して山で家畜を放牧した。山を降りて2年間バヤン・スタルで穀物を栽培した。ブルガン川で大勢が耕作して生活し始めた。そのうち、ソビエトから食糧を輸入され、小麦粉は山積みされた。その小麦粉をブルガン川の堤防のために使った。バイタグにガサランという回族人が侵入し、モンゴルを占領しようとしたが、モンゴルに敗れた。ガサランたちに作られた施設の材料を使ってブルガンの建物を建てた。数年後、労働ステー

	シオンができ、ブルガンの人びとを集めて国家の関所を作ったり、家畜の餌を用意したりする仕事が行われた。こうして3年暮らした。
DM300115	私の膝に傷ができて治療するため、温泉に行った帰りに乗りものがなくて困った。ズンディという人に出会い、彼の馬群から乗り物を借りたかったのだが、断れた。また、ヘシグタイに出会って助けられた。バヤン・スタルで作りかけた農作が収穫した。私はウマネズミの穴を掘って穀物を集めた。ブルガン川に商売のキャラバンが来た。私は穀物で家畜を購入した。膝が治ってまたバトの家畜を放牧した。そうして、6年間人民の家畜を放牧した。山で家畜を放牧していると、カザフ人の男と会って2足の靴下で2頭の羊で交換した。また、あるカザフ人の男はノースタイに50個の銃弾をもらい、代わりに1頭の山羊と1頭の羊を与えた。
DM300121 (1)	物々交換する際、1頭の羊は1鍋の穀物で、1頭の山羊は2つのシャクシの穀物で交換する。
DM300087 (2)	バトの250頭の小型家畜、そのほか、ある人に60頭の山羊、ある人に70頭の羊といったかたちで人民の家畜を集めて放牧した。給料はない。3ヶ月放牧すると、手の平のような磚茶とか1シャクシ分の穀物とか、たまに1頭の山羊や仔山羊をもらう。こうして山に行き、フンデギン・デブセグというところにいたときカザク人と牧草地を争った。
DM300141 (1)	ネグデルはできてなかった。第10ブリガードに所属したとき、私は家畜が少なかったので、タルバガンを狩った。1戸あたりに15匹のタルバガンの毛皮を提出する義務があった。私はネグデルに加入して裕福になった。富人の行為に相応しくないから、狩りをやめた。
DM300141 (2)	兄はネグデルが成立して2年目に加入した。私は3年目に加入した。私はバトの家畜を放牧したため彼にネグデルに加入することが反対された。ドグルが説明して勧められて私はネグデルに加入した。
DM300121 (2)	私はネグデルができた3年目に加入した。不妊の家畜を預けられた。また、私に840頭の羊を任せ、3ヶ月後に肉用に羊を納入した。
DM300127	肉用の羊を納入してから、当年生まれた70頭強の仔羊と20頭余の子山羊を引き続き放牧した。一定ノルマの家畜の乳を供出した。ノルマを満たすと給料がもらえる。その上に仔家畜の料金を加えて7万トゥグリグをもらった。放牧料金は月に4万トゥグリグをもらった。ネグデルの家畜を18年放牧した。妻が亡くなると、私はネグデルの仕事を辞めた。また、私有の家畜に納税の義務を与えられると言われたため、3年間国境に家畜を届ける仕事をした。その後、ツェグで家畜の毛皮、腸、骨を回収する仕事をした。
DM300087 (1)	国家生産計画によって肉を提供するため、2人は1つの組合になって240頭の牛をブルガン郡からフフエルギというところに届き、ロシア人に提供した。
DM300164	私は納入された羊と山羊を国境に届く仕事に当てられた。カザフ人と組んで小型家畜を届けた。ツェグで3年ぐらい家畜を処分する仕事をした。
DM300165	私は54～57歳まで国境へ家畜を届く仕事をした。警備の仕事は最後に61歳で定年した。これまで27年間、年金をもらってきた。
DM300080 (7)	私は西干支で88歳だ。母と兄と姉はここで亡くなった。姉の1人の娘はナライフ市に引っかってそこで亡くなった。彼女に2人の娘と1人の息子がいる。

個人史